モスクワの顔

芹川嘉久子　中央公論社

の顔

芹川嘉久子

中央公論社

モスクワの顔　©1969 検印廃止　定価 430円
昭和44年 4 月20日 印刷　昭和44年 4 月25日 発行
著者 芹川嘉久子　発行者 山越 豊　印刷所 三陽社
発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2—1 電話(03)(561)5921(代)

目次

モスクワのアパート暮し　5
ジーナおばさんと恩給　25
マーシャのはなし　45
サナトリウム『白帆』　67
モスクワくいしんぼ　97
ある日本人　119
日曜はだめよ　143
オーバーの出来るまで　161
数字に強い人たち　191
二つのヨールカ　217
あとがき

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

モスクワの顔

モスクワのアパート暮し

モスクワ市内の交通機関で、いちばん便利な、そして割安な乗物は地下鉄である。地下鉄線は、ちょうど東京の国電の山手線みたいに、モスクワの旧市内をぐるりと取りまいている環状線があり、市の中央部で交差する三本の路線が放射状にのびてこの環状線をつらぬいているほか、環状線の駅を起点にした三つの路線が郊外の新しい住宅地に向って走っている。地下鉄の料金は五カペイカ（二〇円）均一。町の北のはずれから南のはずれまで行こうが、途中で何回乗りかえようが、五カペイカ玉一つあれば用がたりてしまう。

私が住んでいたアパートは、その、地下鉄環状線の北の駅『平和大通り』から歩いて七、八分の横町にあった。大通りまで出れば、ついそこにバスやトロリー、市内電車の停留所もあるが、二年あまりのモスクワ生活で私がいちばん御厄介になった乗物は地下鉄、そして、この『平和大通り』駅のエスカレーターだろう。勤め先の出版所は同じ環状線で五つ目の駅の近くだったし、

零下二十度から三十度にまで冷える冬の街頭で、バスやトロリーを待つより、地下のプラットホームははるかに快適である。

第二次世界大戦中は防空壕の役割もつとめていたという地下鉄のプラットホームはたいそう深く、とても階段でトコトコ登ったり降りたりできる長さではないから、改札口とホームを繋いでいるのは、三本のエスカレーター。上りと下りが常時一本ずつ運転され、ラッシュ時になると残りの一本も動きはじめ、適宜に上り運転になったり下り運転になったりして、乗客の混雑をさばいてゆく。このエスカレーターの速度はかなり速い。一秒間に一メートルたらず走るそうだが、傾斜がきついせいもあって、東京のデパートなんかのエスカレーターにくらべると二倍くらいの速度に感じられる。幅はゆっくり二人が並べる広さ。そんなに速いエスカレーターの上を、さらに馳けおりてゆく乗客のために、エスカレーターの動きに身をまかす人たちは右側に一列に並んで、左側は通路のように空けておく。

モスクワの冬の生活にやっとなじんだばかりの私は、着ぶくれと、両手にさげた重い買物袋で足もとがおぼつかない。うっかり左側に立っていたら突きとばされてしまいそうな勢いで、動く階段を馳けおりてゆく人たちを見ているだけで足のすくむ思いがする。

「なんだってあんなに急ぐのかしら？　買物の行列に三十分も並んだり、レストランで給仕がやってくるのを一時間近くもゆうゆう待っているモスクワっ子が、地下鉄のエスカレーターの上でだけせっかちになるなんておかしいわね」

エスカレーターの降り口で足をとられそうになってまごまごする私をいつもからかう、モスクワ生活の先輩に、私はてれかくしでこんなことを言ってみる。彼は無言で、頭の上にぶら下っている掲示板を指さして、にやりと笑う。その掲示板に記された利用者への注意書きの一項、エスカレーターの上を走るべからず、という文字がちらりと目をかすめる。

『平和大通り』駅のエスカレーターは、上りも下りも一分四十五秒かかる。「熱い、熱い肉入りピローシキ！」と呼びながら駅前で売っているピローシキを一つ買って、エスカレーターへ足をかけたとたんにかじり出したら、下のホームへつくまでにちょうど食べおわったわ、と言ったら、彼は、あなたもそろそろモスクワの生活になれてきましたね、駅の売店で買った新聞を、エスカレーターに乗ったとたんにさっとひろげて読むのがモスクワっ子のイキな姿なんだそうですよ、と教えてくれる。なるほど、一分四十五秒あれば、小さな記事の二つや三つは読めるはずだ、と感心していたら、

「ところで、アベックがこのエスカレーターに乗るとき、男と女と、どっちが先に乗るか知ってますか？」

「さあ……」

「かならず男性のほうが下の段にいますよ、そうすると抱きありのに背の高さがちょうどよくなる……」

まさか、と笑ったが、その後私は、深夜の地下鉄のエスカレーターでいくたびかそんな光景を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目にした。二人分のスケート靴を片手に下げ、もう一方の腕で恋人の肩を抱きかかえている青年、ネッカチーフに包んだブロンドの髪を恋人の胸によせて、じっと目をとじている娘さん、まるで映画の一齣を見るようなそんな姿が、手をのばせばとどきそうなへだたりですれ違い、地底に吸いこまれてゆく。

地下鉄のエスカレーターですれ違う顔、顔——異国の町に住んでまだ日も浅く、とりわけ親しい友人もなかったころの私に、モスクワの生活を語ってくれたのは、目の前を通過してゆくこれらの人々の表情や服装だった。赤ん坊を抱いた若い父親、お下げ髪にピンクのリボンを結び、細い首すじをすっきり反らしたティーンエージャーの娘さん、ロシアの農村を思わせる土の香りをただよわせた、頬の赤い兵士たち、毛皮の帽子のかげにダイヤのイヤリングをきらりと光らせる中年婦人、アフリカからやってきたらしい黒人の留学生……。祭日の前夜には酔っぱらいの陽気な歌声がひびき、花束をかかえた姿が目立つ。真新しい椅子をむき出しのままかついでいるあの男の人は、アパートの新居を手に入れたところだろうか。古風な留金のついたトランクを下げた一行は、ウクライナあたりからやってきたお上りさんかもしれない。ピオネールの赤いネクタイをつけた小学生たちが、先生に引率されてこども劇場へいそぐ。そんなとき、地下道のドームには甲高いはしゃぎ声がひろがるのだった。

モスクワの新名所『国民経済達成博覧会』に通じる『平和大通り』は、一九五〇年代の後半に

建設されたばかりだから、表通りに立並ぶ立派な高層ビルの裏手には、昔ながらの古家が肩をよせあい、かつて『メシチャンスカヤ通り』と呼ばれていたころのおもかげを残していた。唐草模様に似た彫りのある木枠を窓にはめこんだ煉瓦造りの二階建アパートは、ところどころ欠けおちて、ゆがんだ壁に生活の垢をにじませ、頑丈な重い二重扉をあけると、朽ちかけた階段が暗い穴のように階上へ通じている。足もとの歩道すれすれにあいた半地下室の窓には、冬でも観葉植物の鉢植えが飾られ、その奥に垂れたカーテンのかげに住む人の気配が感じられる。木造の平家にかこまれた空地みたいな内庭では、薪用の丸太を挽く男たちや、木の枝から枝へと渡したロープに洗濯物を吊している老婆の姿なども見られた。

「あんな家に、一度住んでみたい……」

散歩の途中で目にした石造りの古風なアパートを眺めながらつぶやくと、ロシア人の友だちが笑い出した。

「とんでもない。あそこにはアブラ虫やら南京虫がいて、ネズミは出てくるし……とても住めたもんじゃありませんよ。モスクワではいま、ああいう古い建物をどんどんこわして、近代的な高層アパートに建てかえているんですからね」

革命前のロシアの小説にでも出てきそうな、そんな住宅街にそこはかとない情緒をおぼえるのは、異邦人の身勝手な感傷にすぎないのである。聞くところによると、モスクワの住宅事情はまだかなり深刻らしい。ここ当分、地方からの転入はきびしい制約を受けているそうだし、一部屋

をカーテンで仕切って不自由な同居生活をつづけている家族も多いという。新しいアパートの部屋をもらう順番を待っている人たちのために、市の周辺には各所で大規模な団地の建設がすすめられており、市内の古い建物は思いきりよく取りはらわれて、新しい高層アパートに変ってゆく。その上、目抜き通りの交差点を立体化する工事だとか、新しい商店街やホテルの建設、古いビルの化粧なおしなど、モスクワの町はどこを歩いても土を掘りかえしたり、足場を組んだりした工事現場にぶつかる。モスクワはいま、変貌の真最中なのだ。

私の住居が割当てられたアパートの棟は、この一郭で最初にできあがった九階建、ひきつづき第二棟、第三棟、と同じような建物が並ぶ予定なので、道路も内庭もまだ整備されていない。この建設工事は私が帰国するまで蜒々とつづき、周囲の古めかしい家屋はつぎつぎに取りこわされていった。敷地をならすトラクターの音がやむと、水道や電線を埋めこむコンクリートの四角い管が地中に横たわり、排水溝がつくられて、その上に簡単な基礎工事が施される。あとは煉瓦を積みあげてゆくだけで高層ビルが建つという、そこは地震を知らない土地柄のありがたさで、日本のように鉄筋だの鉄骨だのの複雑な工程はぬきですむ。そのかわり、きびしい寒さのおとずれとともに工事は中断され、春の雪どけが待たれる。

ところで私の住居は、その九階建高層アパートの四階にある二ＤＫ。十八平方メートルの居間兼書斎と十五平方メートルの寝室、他に台所、浴室、トイレが廊下をへだてて配置され、寝室の奥には納戸風の戸棚、居間の東向きの窓辺にベランダがついているという構えで、家賃は一ヵ月

十六ルーブル十三カペイカ（六四五二円）。モスクワではこれだけの広さだと、夫婦と幼児二人くらいの家族に与えられる居住面積なので、一人暮しの私が払う家賃には約一〇パーセントの割増金が加算されている。一年のうち十月から四月までの冬季六ヵ月あまりの間、終日通っているスチーム煖房の費用と水道料金、台所と浴室に供給される熱湯の代金もこの家賃のなかに含まれている。水道や電気の故障は、近くの住宅管理局に連絡すると、修理工がやってきて直してくれるが、これも無料である。モスクワでは大学出の初任給が百ルーブル（四万円）前後だそうだし、夫婦共稼ぎが原則になっているから、住居費の支出はあまり負担にならない。

それに私の場合は短期のモスクワ住いなので、家具は勤め先の出版所から貸与された。洋服箪笥、鏡台、ソファと三点セット、食器戸棚、食卓と椅子四脚、書斎用の机と椅子、電話台、ベッドにカバー付きの毛布が一枚、枕とシーツ、綾織りのテーブルクロースがついて、一ヵ月七ルーブル六十五カペイカ（三〇六〇円）ずつの借賃が月給から差引かれる。台所の流し台と天火のついたガスレンジは、住宅に備えつけられた規格品だった。私が出版所から借りた家具は、どれもリガ製の新品で、洋服箪笥の引き戸の重いのと、食卓の脚がかたがた揺れること、それに、テーブルクロースやどれも二枚ずつ用意された毛布と枕のカバー、シーツがすべて中古であるのを我慢すれば、一人暮しには充分すぎるほどの調度だった。

モスクワに到着してから、このアパートの入居許可をもらうまでの二週間、私は町はずれのホテルに住んでいた。アパートに移ってまもない日曜日、入口で五、六人のこどもたちにかこまれ

た。

「あんた、どこの国から来たの？」

「日本だよね。四階に住んでるんだろ」

百世帯近い家族を収容できるアパートで、外国人は三組しか住んでいないというから、日本人が入居したことはいつのまにか知れ渡っている。

——あんたのとこ、一人っきり？

——こどもはいないの？

——淋しくない？

——あんた、いくつ？

大人たちの話題にもなっているらしい質問をつぎつぎに浴びせかけてくる。

「名前はなんていうの？」

「カクコ」

「えっ、カケク？」

「ちがう、カ、ク、コ」

私の言葉を口々に真似て、こどもたちはどっと笑う。外国人の聞きなれない名前がおかしいだけではなく、私の名前はロシア語の発音にかかるとひどく言いにくいのだ。文法書によると後舌音とか喉音とか呼ばれているロシア語のKは、舌のつけ根に近い部分を上顎の軟口蓋におしつけ

て、そのわずかな隙間から吐く息とともに音を発する。そんなKの文字が三つも重なっている奇妙な名前を呼ぼうとすれば、咽喉ぼとけのあたりに異常な抵抗が加わり、カクコはクッックッコッというややこしい発音にならざるを得ない。

その翌日、工事場の盛土に積った雪の上で遊んでいたこどもたちが、買物に出かけようとする私を見かけて、大声で叫んだ。

「へーい、コッケー、どこへ行くの？」

こどもたちのなかで、私がいちばん仲よしになったのは、小学校四年生のマルガリータだった。彼女は横町の通りを一つへだてた、これも新築の十一階建アパートの一階に住んでおり、タタール人の父親はタクシーの運転手をしているという。マルガリータ、愛称リータは、くせのない黒い髪を短いおかっぱに刈り、茶色の目をした東洋風の顔立ちだ。切手のコレクションをしているから日本の切手をちょうだい、と私の部屋へときどき訪ねてくるようになったが、そのたびにかならず散歩に行こうよ、と誘い出す。

モスクワの人たちは実によく散歩をする。月曜日に出勤すると、昨日はどこへ散歩に出かけましたか、ときまって誰かにたずねられるほどで、休日には公園や郊外を歩くことが健康法のひとつになっているようだ。

モスクワの市内には、日比谷公園の十倍以上も広い大きな公園が、三つある。手入れのゆきとどいた並木道や花壇、野外劇場やら音楽会場のあたり、ブランコやスベリ台をはじめ、有料の観

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com